



～今後日本の犬社会が目指すものは？～

ドイツ・犬物語⑤

「ベルリン動物ホーム訪問記」

好評連載
第5弾!

扉をあけて建物に足を踏み入れた途端、
激しく吠え立てる中型犬。

名 前：ペリート

誕生日：2008年7月頃

種 類：スタッフォードシャー系雑種

性 別：雄（去勢手術済み）

活発なペリート君はなんでも壊してしまうので、ご主人様に愛想をつかさされた と説明が続く。

目新しい侵入者に対する警戒心で吠えているだけなのだろうが、私の耳には、非情な仕打ちを受けたにもかかわらず人間の愛情にすがろうと発する悲痛な叫び声に聞こえる。

残念ながらこのベルリンにも、犬の飼育を放棄する人達がいる。そうした犬を收容し新しい飼い主が見つかるまで世話をしているのが動物愛護協会ベルリン支部の動物ホーム。虐待されている馬車馬を見てプロイセンのある公務員が19世紀半ばに設立した反動物虐待協会を前身にもつこの組織が運営する施設には、名前の通り犬に限らず猫、鳥、ウサギ、爬虫類から豚まで、あらゆるペットが收容されている。ドイツに住む犬たちの悲しい現実にも目をむけるべく、今回は欧州最大規模といわれるこの動物ホームを訪ねてみた。

100年前の施設が手狭になり移転して2001年に完成した新ホームの土地購入から建設までの総費用は約46億円。面積16ヘクタール、サッカーグラウンド30個分に相当する広い敷地に各種動物用收容棟（犬用には5つのパビリオン）、ドッグラン用広場、事務所、イベント会場、動物クリニックなどが機能的に配置されている。約100名の職員のうち獣医が9名。年に1万2千匹ほどの動物を引き取る施設の運営には1日1万ユーロかかるという。公的支援は全く受けず、資金のすべては動物愛護協会の会員1万5千人の会費と寄付でまかなっているという。ちなみに年会費は低収入割引制度もあり最低20ユーロからだ。

冒頭のペリート君と運命を共にする犬は現在約240頭。施設が引き取る犬は毎年700から1000頭で、ベルリンで飼われている犬の6～7%にあたる。飼い主自身が犬をホームに引き渡しに来る場合と、路上などに放



写真提供：Tierheim Berlin

動物ホームの
入り口

置された犬を保健局が保護して連れてくる場合とその割合は半々だという。まれだが虐待されている犬を保護することもある。民間機関の同協会には強制権がないので警察や保健局との連携プレーとなる。警察や保健局の獣医には動物保護法や動物飼育法を守らない飼い主から犬をとりあげる権限が与えられているのだ。

以前は、休暇中の世話に困るからと夏休み前に犬を施設に持ち込む人が多かったそうだが、今は「世話する時間がない」「引っ越し先に連れていけない」「アレルギーの原因」「離婚」といった時代状況を反映する理由が上位を占めている。中には「買ったけど気に入らない」「思ったより費用がかかる」といったあまりにも無責任な人もいる とホーム広報担当のケーニッヒさんは頭をかかえている。

ホームの目標はすべての犬に新しい飼い主を見つけることだが、果たしてそれは可能なのか？ホームでの生活とそれからの運命については次回にご紹介したい。

池永 記代美（ベルリン在住）



新しい飼い主との
出会いを待つ犬

写真提供：Tierheim Berlin

注：1ユーロ＝約130円